PROJECT

インドにおける新たなメディア状況と芸能の現在

文 松川恭子

共同研究 ● グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究（2011-2014）

グローバリゼーションの多様性と南アジア文化の環流

近年の文化人類学におけるグローバリゼーション研究では、欧米発の政治・経済システムが世界を席巻し、文化の画一化を起こしていくとする西洋中心主義の見方を批判し、アジア・アフリカ地域における多様性・重層性に目を向けようとする動きがある。具体的に言えば、欧米を発信源とする「大文字のグローバリゼーション」だけでなく、近代以前から欧米の外で形成された交易ネットワークなどが作り出す「プライマリー・グローバリゼーション」といった複数のグローバリゼーションが絡み合い、各地でどのような現象が生成しているかをみていく必要があるというものだ（三尾・床呂 2012）。

欧米以外を起点としたグローバリゼーションについて考えるという点では、本研究も同様の問題意識を持っている。三尾（2011）が指摘し、筆者が本誌 139 号でも述べたように、南アジア地域（特にインド）を起点として欧米に向かい、形を変えながら再び南アジアに戻る、あるいは他の地域に向かっていく文化の「環流」のプロセスがある。その中で「インド的なるもの」が形成され、グローバルに広がっていることに我々は着目している。これまでの 2 年半にわたる事例の検討を通じて、インド舞踊や音楽などの芸能にも環流現象がみられることがわかってきた。

文化のインドからの環流を考えたとき、その基盤となるものが 2 点挙げられる。1 つが世界に広がるインド系移民のネットワークであり、もう 1 つが 1990 年代以降に現れた新しいメディア状況の形成である。本稿では、インドにおけるメディア状況と芸能の現在について、これまでに本研究会メンバーが報告した事例も参照しつつ考えてみたい。

インドにおけるメディア状況の変化

インドのメディア状況は、1990 年代初頭の経済自由化と同時期に劇的に変化し始めた。その契機となったのは、衛星放送の開始である。1947 年の独立以来、インドのメディアは国家のコントロール下にあった。規制があっても民間資本が主体だった新聞と映画に対して、テレビ放送については、国営放送ドゥールダルシャンによる独占状況が長く続いた。それが 1991 年、香港に拠点を置く衛星放送局 STAR TV（以後、スター TV）が通信衛星 Asia Sat 1 により放送を始めたことで、状況に変化が起こったのである（Athique 2012 他）。スター TV に続き、日本のソニー・エンターテインメント・テレヴィジョンやインド資本の Zee TV が衛星放送市場に参入した。更にタミル語など、ヒンディー語以外の地域語放送局のチャンネルが急激に増えた。ローカルなケーブル会社が衛星放送信号を受信し、各家庭にケーブル・ネットワークを介して独自にパッケージ化した多チャンネルの番組を配信するシステムにより、特に都市部に住む人々が月極め料金で無数の番組を視聴できるようになった（現在は各家庭がチューナーとアンテナを購入する直接衛星放送のサービスも提供されている（塙 2006））。この現象はインド国内に留まらず、多くの放送局が海外のインド系移民に対するサービスを開始した。スター TV、ソニー、Zee TV などヒンディー語放送を中心としたチャンネルを主とする放送局に限らず、地域語放送のチャンネルも各言語を母語とする人々向けに放送を行っており、インド発の多様な情報の流れを生み出している。たとえば Zee TV だけでも 10 以上のチャンネルを展開しており、169 ヶ国、6 億 7 千万人の視聴者がいるという（http://www.zeetelevision.com/about-us/about-zee.html　2013 年 9 月 5 日閲覧）。

2000 年代に入ってからは、利用料金と端末の低廉化が進んだ結果、携帯電話が爆発的に普及した（Jeffrey and Doron 2013）。近年では、通話だけでなく、音楽や映像を楽しむことができるマルチメディア対応の端末利用が都市部を中心に増えている。低所得者はインターネットを利用して音楽や映像コンテンツのファイルを自分でダウンロードするのではなく、端末販売店で端末にコピーしてもらうことが多い（Smyth *et al*. 2010）。

ロンドンのボリウッド・ダンス・スクールのホームページ。インド映画の中心地で、製作スタジオが集まるボンベイ（現ムンバイ）とハリウッドを掛け合わせた「ボリウッド」は、インド映画を象徴する言葉としてよく使われる（http://www.honeysdanceacademy.com/　2013 年 9 月 5 日閲覧）。

映画については、衛星放送開始以前にも大衆のメディアとして力を持っていたが、衛星放送開始後に家庭でも簡単に視聴できるようになり、影響力が更に大きくなった。音楽専門チャンネルでは歌と踊りのシーンがミュージック・ビデオのように繰り返し流されるようになった。映画の挿入歌は、1980 ～ 90 年代はカセットテープ、それ以降は CD で販売されていたが、近年、人々は携帯端末に音楽ファイルをダウンロードするようになった。このように、様々なメディアの拡大により、コンテンツの消費とでも呼べる状況が生まれた。

レモン唄を歌う村の女性たち（2012 年 3 月、小西公大撮影）。

新たなメディア状況と芸能の現在

新たなメディアのあり方は、インドにおける芸能を取り巻く状況を大きく変化させた。緊密な師弟関係の中で継承されてきた音楽や舞踊の技や知識が、ミュージック・スクール、ダンス・スクールの形で一般に開放されるようになったのである。この状況を生み出す一因となったのは、テレビで放映される一般参加型音楽オーディション番組 Indian Idol や、ダンス・オーディション番組の Dance India Dance の存在だろう。番組の中では、古典音楽、ポップ・ミュージック、様々な舞踊の形式が参加者により披露される。この混淆状態は、インド映画の挿入歌に合わせたダンスのシーンにも共通している。テレビ番組のフォーマットは、地域の学校や祭礼における歌やダンスのコンペティションとして再現される。都市部では子どもや若者に「ボリウッド・ダンス」を教える講師がいて、一般の需要に応えている。ボリウッド・ダンスはイギリス、アメリカ、そして日本にまでも広がっている。

一方、ローカルな芸能も、メディアに乗って芸能が消費される現状と無縁ではいられない。小西公大（東京外国語大学）は、インド北西部に広がるタール沙漠のムスリム楽士集団マーンガニヤールの女性たちの間で歌い継がれてきたレモンをめぐる唄が、コミュニティの folk song となり、最終的にはインド映画の挿入歌（film song）として広く消費の対象となるプロセスを、人々の唄に対する解釈と歌詞の変化を考察することで明らかにしている。元々レモン唄は、婚姻儀礼で女性たちが特定のフレーズを繰り返すものであり、内容は、なかなか手に入りにくいレモンを妻が夫にねだるというものだった。この唄はマーンガニヤールの歌手、Gazi Khan によって編曲され、コミュニティの定番曲となる過程を経て、最終的にはヒット映画 Hum Dil De Chuke Sanam（1999 年、邦題『ミモラ～心のままに』）の挿入歌 “Nimbooda（レモン）” に形を変えた。人気女優のアイシュワリヤ・ラーイが踊ることで定番のダンス・ナンバーとなったのである。映画版レモン唄の歌詞では、ローカルな文脈が消去され、視覚的にはラージャスターン地方を思わせるが、どこか特定できない場所で華やかな踊りが繰り広げられる。マーンガニヤールは、1980 年代から、パトロン・クライアント関係を離れ、観光客に対する演奏活動を行うようになった。エキゾチックな砂漠の楽士集団というイメージは、映画というメディアに乗ったレモン唄とともに国境を越えて広がり、外部からの視線を受けてマーンガニヤールの実践も変化していっていると言える。

新たなメディア状況は、インドに限らず、他の南アジア地域でもみられる。本研究会は、あと 1 年強を残すばかりであるが、ミクロな芸能と芸能実践の変化を捉えることで、南アジア的なグローバリゼーションの特徴を明らかにしていきたい。

【参考文献】

Athique, A. 2012. *Indian Media: Global Approaches*. Cambridge: Polity Press.

Jeffrey, R. and A. Doron 2013. *The Great Indian Phone book: How Cheap Mobile Phones Change Business, Politics and Daily Life*. London: C. Hurst & Co. Ltd.

Smyth, T.N. *et al*. 2010. Where There's a Will There's a Way: Mobile Media Sharing in Urban India, *CHI '10 Proceedings of the SIGCHI Conference on Human Factors in Computing Systems* : 753-762.

塙和磨　2006「インド放送事情──衛星放送 Tata sky の登場と有料放送市場の動向」『放送研究と調査』56(11)：42-49。

三尾稔　2011 「「環流」する「インド文化」──グローバル化する地域文化への視点」『民博通信』132：2-7。

三尾裕子・床呂郁哉　2012「なぜ『グローバリゼーションズ』なのか」三尾裕子・床呂郁哉編『グローバリゼーションズ──人類学、歴史学、地域研究の現場から』pp. 1-30 弘文堂。

まつかわ きょうこ

奈良大学社会学部准教授。専門は文化人類学、南アジア地域研究。論文に「社会空間における舞台上の物語の共有／非共有──インド・ゴア社会における大衆劇ティアトルをめぐって」『日本文化の人類学／異文化の民俗学』（小松和彦還暦記念論集刊行会編 法藏館 2008 年）、「インドにおけるポルトガル植民地支配と村落──ゴア州のコムニダーデ・システムの現在をめぐって」『コンタクト・ゾーンの人文学〈第 4 巻〉Postcolonial/ポストコロニアル』（田中 雅一・奥山 直司編 晃洋書房 2013 年）など。